

令和元年度 第7回四万十町文化的施設検討委員会 議事録

日 時 令和元年12月3日(火) 14:00～17:00

会 場 四万十町役場 東庁舎1階 多目的大ホール

出席委員 内田純一、谷口和史、林 一将、高垣恵一、山本哲資、池田十三生、林 伸一、川添節子、田邊法人、青木香奈子、酒井紀子、刈谷明子、下元洋子、中平浩太

欠席委員 友永純子

事務局 熊谷敏郎教育次長

生涯学習課(味元伸二郎副課長、森山典将主幹、松田佐穂主任)

図書館・美術館(長木千葉美、谷脇八代美、山地順子、山口香)

(事務局)

定刻となりましたので、ただ今から令和元年度第7回文化的施設検討委員会を始めます。さっそく議事に入ります。内田先生、よろしく申し上げます。

(内田委員長)

皆さん、こんにちは。ご多忙のところお集まりいただきありがとうございます。

おかげさまで、お手元にあります基本計画がまとまりました。本日第7回で、実質的にこの計画を確定し、町に手渡すように進めていきたいと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

議事に入る前に、岡本さんから情報提供がございました。

(ARG 岡本)

たいへん弊社事で恐縮ですが、以前に担当していた下吹越が、先々週に無事出産いたしました。

大変心配していただいておりますが、(委員たちの拍手に対して)ありがとうございます。先々はぜひ子どもを連れて四万十町の皆さんにご挨拶できれば、心配していただいております、と申しておりました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

生まれるということは非常に良いことです。この施設もみんなで生み出していきたいので、非常に良いお話だと思って伺っておりました。

それでは本日の進め方ですが、大きく二つ考えております。

一つは、冒頭に申しましたが、この基本計画を確定することです。特に第二章は、皆さんにご協力いただきながら、ワークショップを続けて継いできたものをストーリーとしてまとめております。この部分を中心になるかと思えます。この部分を含めて計画を確定するのが前半です。

後半は、実質的には本日の会議で終了しますが、これで終わってしまって4月まで何もしないのは大変もったいないと思えますし、この計画や町の気運を充実させる上で、1月から3月にかけてどのようなことをすればよいか、協議をしたいと考えています。

では最初の議題です。皆さんのお手元に計画書がございます。まず岡本さんからこの第二章のストーリーをご紹介いただいて、そこから協議を進めたいと思えます。

(ARG 岡本)

ほぼ最終版になりますが、お手元にある基本計画、第二章の他の変更点も含めて説明します。

基本計画の冒頭には中尾町長の言葉を載せていただいております。

文字の字体ですが、従来のものより一回り大きくしたのと、「ユニバーサルデザインフォント」という文字の読み取りが苦手な方にとっても読みやすいといわれているフォントに変えました。今までのものに慣れた方には一瞬読みにくいかもしれませんが、最近は教科書などでもこの文字の採用が進められています。識字障害のある方にとってはこのほうが読みやすいということで、この文字にしました。

今日、重点的に見ていただきたいのは第二章の利用体験ストーリーです。基本構想のワークショップでもやりましたが、実際に新しい文化的施設が町に生まれたあと、その施設を中心に町ではどのような物語が生まれているのかをまとめたものです。

皆様に色々ご提出いただきましたが、特定の人のもをそのまま当てはめるのではなく、こちらで(各ストーリーの)要素を組み合わせながら反映しました。具体性がありつつ、「これは多分自分のことだよな」と思い浮かぶのではないかと思います。それを4本、4人分作っています。

第三章では、前回ご指摘いただいた点の書きぶりを、赤字で修正しました。そんなに大きな変更点があるわけではありません。

(内田委員長)

ありがとうございました。

改めて全体についても協議しますが、まずは第二章についてご覧いただき、ご意見・ご協議をいただきたいと思えます。

岡本さんのおっしゃるように、皆さんから出していただいたストーリーをそのまま載せるのではなく、その中から利用体験のストーリーを、リアリティを持たせて載せていただいています。「こうしたい」という希望ではなく、「こんなことができている」という将来像を重点的に書いてあることもご理解いただいて、ご感想等を頂きたいです。

【委員が第二章の利用体験ストーリーを読み込むための時間を、5分ほど設ける】

(内田委員長)

そろそろ読み終わった頃合いかと思えますが、いかがでしょうか？

(酒井委員)

この4パターンの、老婦人、お母さん、女子高生、働き盛りのお父さんの設定の中で、どこを強調して表現したかを、岡本さんに説明していただきたいです。

それと、最近の話題で、図書館と独身男性の介護や認知症の進捗が関係していて、図書館に行くことにより（認知症の進捗を）遅らせることができるというお話も聞きます。この章だと独身男性のパターンもあっていいと思いました。

(ARG 岡本)

ありがとうございます。まず全体的なまとめ方について説明します。

最初に皆さんから頂いたストーリーに全部目を通して、順次入ってきたものも適宜追加しながら、中でも特に重要なエッセンスになるであろう部分を抜き出したファイルを作りました。それを見ながら、今まで私も2年間関わってきておりますので、四万十町の皆さんの顔を思い浮かべながら、なるべく具体的なストーリーとして、これにはモデルがいるということを目ざと想定できるように書き上げました。

他方、ここで付き合いから言い訳をすれば、私が頂いたストーリーはあくまで何年後、文化的施設が実現した日以降を、四万十町全体で見られるであろう風景を描き出すものになってますので、個別の要望等は採用していない形になっています。

1番目はすぐ思い当たるでしょうが、川添先生が書かれたものに非常にインスパイアされて書きました。ただし、町内で働いていても町内に住む人ばかりではありませんし、町内にご両親がいるから町外からここに顔を出している方もいらっしゃるという暮らしぶりもあるので、そういうパターンを設定してみました。

1番目のストーリーでは多世代間の交流が大きなキーワードです。町外にお住まいの主人公とお孫さん、そして町内にお住まいの、お孫さんから見ればひいおじいちゃん・ひいおばあちゃん。四万十町では決して珍しくないパターンと言ってよいかと思えます。

あと、地域の子どものたちの関係性が非常に深いので、川添先生が実際にこういうふうになられた時も、町内にいる限り「先生、先生」と呼びかけられる日々は続くんじゃないかなと思います。現役時代の関係がそのまま続く町の雰囲気を描き出し、同時にカフェやスイーツといった四万十町らしさも、そこに出てくるであろうと書き上げた次第です。

2番目は結婚を機に十和に移り住んで20年経つ人。酒井さんと刈谷さんに若干失礼ですが、10年後想定で書いてます。私もお二人のお子さんにお目にかかりましたが、あのちびっこたちが大きくなった状況ですね。多少手はかかるでしょうが今のような手のかかり方ではなくなって、段々大人になっていくというシーンを考えました。

今回の計画の中ではそこまで議論できてませんが、大きな合意としてあろうかと思う「十和にも何らかの分室が必要」という部分はここまで皆さん熱心に議論されてきました。ですからあくまで仮定ですが、十和にも分室が出来ていることを前提にしたストーリーです。

その上で、十和に出来る分室が、窪川に出来る図書館・美術館と、それこそ今まで議論してきたようにインターネット環境で常時つながっていて、遠さを感じさせない。地方だからこそもっと最先端を取り入れて近しくつながっていく関係性の深さを表現したつもりです。

ここで「町外に引っ越したSさん」にこういうストーリーが生まれるといいんじゃないかと。10年後にもなれば下元さん、刈谷さん、酒井さんのお子さんたちもそれなりの年齢になります。幼なじみでもあるし、仲良くしてケンカだってする関係になっている中で、この町ならではのその関係がもっと深まっていくという部分に対してこの文化的施設が特に、旧2町1村の中に多様に含まれているということを表示しました。

3番目は、基本構想最初のワークショップに来てくれた、当時の四万十高校1年生の子です。一人で美術部員をやっていると聞いた彼女を意識して、彼女が理想としたことをきちんと実現していること。それから大人が彼女の夢を実現するプロセスを通じて、彼女が美大や芸大に進んで、その背中を追う後輩が生まれるというところを表示しました。特に、これは「図書館・美術館」ですので、全体的に美術館の議論がされ尽くしてないとは感じてますが、このようなアトリエ空間が実現することにより、窪川高校のクリエイティ部の皆さんとも交流が図られる。10年後も四万十高校、窪川高校が存続してる前提ですが、小さな町の二つの高校だから、そこに接点があり、そこに下元さんや町の諸先生方との交流がここで繰り広げられるという日常を描き出してみました。

図書館・美術館が新しくなることによって、この町で、さらに自分の夢を大きく膨らませていく子が続いていくという感じですね。私が見てきたこの町で見てきたアートに取り組む若い人というのと、やっぱり、下元さんがいて、あの女子高生がいて、今、小6や中3くらいの子たちがその背中を追っていく。そういう場になる。最後に書いてある「みんなが帰ってきてたまに集まる場」としての窪川の施設を意識しました。

4番目は、図書館として非常に役立つ存在であることを描き出したほうが良いと思って書きました。

この第二章の議論を、今年度、かなり最初の段階でした時に、皆さんから上がったのが、四万十町職員の方がどう使うかが大事だという議論でした。そこを踏まえて（主人公を）役場職員という立場にしました。町内には様々な職種をされてる方々がいらっしゃいますが、皆さんからすれば比較的分かりやすいモデルだと考えました。

これはよくある話だと思いますが、役場職員は図書館を使わない。どこの自治体でも聞かれる話です。現状の図書館であれば、読書支援施設という趣が強いのでそうなるのは分かりますが、新しい文化的施設では実際に役所の仕事をする上でとても役に立つ。

そしてもう一つ、ストーリーとして重視したのが、司書の皆さんはそこで大変活躍されてる。何を困っているのか、任せて、ちょっと預けてくれたら答えを出してあげるからと。単にハコとしての図書館・美術館がおしゃれでキラキラしてるんじゃなく、そこで働いている人たちの力があって、住民が、あるいは役場の人も支えられている。そしてより良い町になっていく。そういうストーリーを描きました。

特に大事なのが最後の場面です。今の図書館・美術館はどうしても子どもが使う施設という趣が強いですが、新しくなったら、お子さんの利用に負けないくらい親御さんが、特に現役世代の親御さんがバリバリ趣味や仕事に使ってる、そういう文化的施設をイメージしました。

酒井さんのご指摘はもっともです。男性目線が少ない気はします。色々織り交ぜてはいますが、これから大事なのは独身男性、そろそろ結婚を考えているとか、悩んでいて町を出ようか考えたんだけど、とか、そういうストーリーがあったほうが良い気はしています。

(内田委員長)

ありがとうございます。

今の最後にあったことで、四つのストーリーがありますが、仮にもう一つ考えるとすれば、男性の利用に視点を当てたモデルが出てきてもいいとのことでしたが。

(酒井委員)

いま話題になってるのが、退職後に居場所がなく趣味もない男性が、図書館通いを始めてから、認知症の進度が遅くなったというお話がありまして。

四万十町は高齢者の人口比率がかなり高いです。この中に、医療費とか犯罪とか、社会的なリスクとコストを下げる役割が、図書館にはしっかりあるという文が入ってると、図書館自体に税金を使うほうが断然いいんだと分かりやすいかと思いました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

他にはいかがでしょう？ 男性の項でこんなところを入れてみてはどうかという視点も出していただけると。10～20年後のお話ですから、過去にバリバリ働いていた人がこんなふうになって、という。

福祉や医療の関係もあるでしょうし、新たな友達を見つけて次のステップに向かうとか。

定年までバリバリ働いていたけど、その後の人生はさらに新たに色々なものが広がっているというような、そんなストーリーを、あと一本入れてみてはいかがか、ですが。

中平さん、どうでしょう？ 今の男性目線での話で。こんな使い方がいいとか、ご意見等あれば。

(中平委員)

僕は、図書館には割とよく行くほうですが、普段の生活で疑問に思うことをちょっと調べに行きます。ネットで調べることができますが、いまいち信ぴょう性のない情報が多いのでね。やっぱり一度は辞書や本で確認したほうがいいので図書館に行って調べますし。あとは本を読みたくなったら行く感じかな。

ぱっと思いつくのはそれくらいですね。それ以外だとなかなか。はい。

(内田委員長)

ありがとうございます。

ネットで調べる以上に大事な役割、方法があるんだというストーリーを描くのもまたいいと思います。

高垣先生、いかがでしょう？

(高垣委員)

私はストーリーボードを提出する時に、美術家を目指す若い人たちが制作したり学習したり、共同制作をして研究し合う場所にぜひしてほしいと書きましたが、果たして自分はそういうことをやるだろうか考えた時に、多分、しないと思います。

私はいわゆる、田舎では見ることのできない名画を、静かに堪能する美術館のイメージを持っています。ここに書いてあることは若い人のために大事だけど、多分自分はしないだろうなと思いながら読

みました。

(内田委員長)

ありがとうございます。

多様な使い方があるでしょうが、今後の一つの使い方として、ここに出してある方向も大事だとは思っていただいていると。

続いていくという部分も大事ですよ。夢を膨らませる子どもたちがどんどん後に続いていって。その中に高垣先生の言う「本物の絵」と、質の高いものと出会う機会も当然必要です。そこで期待されている姿は、教養深く広い、そんな人間像が見て取れます。

(ARG 岡本)

確実に想定される利用ケースは、図書館に来て宿題を来て進みましたとか、美術館に来て絵を鑑賞しましたとか、普通に画一的に行われるケースは載せず、むしろ現状の図書館・美術館ではこういうことが起こると想定されないものを中心に載せてます。

私もまさに、四万十高校に通う女子高生のストーリーはまさに、高垣先生や池田先生を思い浮かべながら書きました。

つまり、この町で先生方の薫陶を受けて成長した、美術を愛好する若者たちが帰ってきた時に、先生方や下元さんのような「先輩」に囲まれながら、楽しいひと時を過ごせる場としての新しい図書館・美術館であってほしいと考えました。だからそこは、趣味や関心をつながりとした、世代を超えたコミュニケーションが生まれるという形が良いと考えてます。

(酒井委員)

それは、基本計画としてこの形がほぼそのまま、プリントアウトしたものが、配布したり閲覧したり、希望者に渡したりすることができるってことですか？

HPにはこれが載るとのことですが、私たちは岡本さんの考えを聞いて、今までの経緯もあるので、この利用体験ストーリーがあることに違和感がありません。一応は呑み込めます。でも初めて見た方は、開いて唐突にこれがあって載っていても、「なぜこれをここに入れないといけないのか？」と、いまいち趣旨が分からないのではないかと思います。

これの中身うんぬん以前に、p10とp11の間に補足があったほうがいいかと。

あと、白紙の一枚を入れて、「皆さんでたくさん夢を描いてください」とか紹介するなり。

そういった、見る人にとって分かりやすいものが一個入ると、広がりやすいかと思いました。

(内田委員長)

ありがとうございました。

今の酒井さんのご意見、取り入れさせてもらってこちらで考えたいです。

おっしゃる通り二章は唐突感もありますし、最後に白紙があって「ここはあなたの描くところ」ってやり方があるかもしれません。

基本計画ですので、行政側はこれをパブリックコメントにかけてご意見も頂き、それが次の計画、業者

はこれをベースに入るという流れです。

(ARG 岡本)

これがどういうふうに出てくるかという説明と、あと、これは計画書としては異例ですが、今の酒井さんの意見はすごく良いです。「最後の1ページはあなたの手で埋めてください」とか、町民の皆さんにもっともっと知っていただきたい、参画していただきたいという委員さんの想いがそれこそつながっていて本当にいいと思いました。

今後また何かの形でワークショップや設計の協議をする際も、まずはみんなでそこを描き出すことをずっと続けると良いと思います。これはオープンしてからもそうでして、その場をどうしていくのがいいのかを常に考え続けることが、誰もが来やすく来なくなる施設になると思うので、それはぜひ反映させていただければと思います。

なかなかないタイプですが斬新で非常に良いです。本質的にいいなと思ったんです。

(内田委員長)

ありがとうございます。

他にはどうでしょう？ 先ほどの独身男性の事例をちょっと工夫して入れるのも案としてありますが、あえて載せなくても一つ、白紙のもので「あなたの～」という言い方もあります。どういたしましょうか？ シニア男性の分が少し弱いかな、という話もありましたので、それを載せることも話題に上がりましたが。

林さん、何かありますか？

(林(伸)委員)

こういうストーリーが載った計画書をあまり読んだことがないので、ぱっと読んだ人がこれを体験談だと思うのか、イメージで書いてあると思うかによって受け取り方が違うので、イメージであることはちゃんと伝えないといけないと思いました。これだけ読むと、今までの図書館・美術館でこんなことがあった、と思われそうな感じがしたので、そこを書いておいたほうが良いと思いました。

人それぞれに捉え方があると思うんで、こういうものを付けといたらイメージが湧きやすくていいと思います。

(内田委員長)

男性としては何かありませんか？ バリバリ働いてる世代ですが。

(林(伸)委員)

そうですね。これの時に委員会に出られなかったのもありますが、自分に近い内容もありますし、「こういうこともできるんだ」という想像ができる良い文章だと思います。小説みたいに書いてあったらもっと面白いかもしれないけど、そこまではさすがに求められないので。はい。

(内田委員長)

ありがとうございます。

それではこの第二章で、何か他にありますか？ 出していただいたものは最終的にこちらで引き取って出していきたいと思います。ご意見頂けますでしょうか？

(山本委員)

この文章を見ても、絵が出てこない。

それから誰がどういうふうに通ってるか。特に小中高の児童・生徒がどれくらい通うことができるか。

最初に立地を書いてありましたよね？ だから僕も一生懸命に、出来上がった美術館や図書館を想像してみましたが、それがどうしても繋がらない。

これを読んだ人がどういう施設を想像できるかという心配を大変します。

以上です。

(内田委員長)

ありがとうございます。

何か工夫してみてもという案はございますか？

(山本委員)

やっぱり都市計画をきちんと出さなきゃいけないと思います。アクセスを全部。どういうふうに繋がってるか。

(四万十町は)淡路島くらい大きい町ですのでね。みんなが平等に使える施設ならばよっぽど考えないと、いい施設は出来ないと思います。

(内田委員長)

ありがとうございます。

その方向性は、今後も計画を立てていく段階で論議する必要があるとは思いますが。

このストーリーについてはイメージが湧きにくいということですが、何か工夫があればとのことですが。一応、世代とエリアを意識しながら書き込みはしました。どこに住んでいるかがもっと詳しいほうが分かりやすければ、地名を具体的に入れるという手はありますが、入れたら入れたで別の問題が生じたりすることもあるって、これくらいが現段階ではいいと感じますが。

では、この第二章は、ストーリー前に解説を入れることと、先ほど言った工夫と、それから白紙のページを最後に入れること。さらに男性目線についても考える方向で行きたいと思います。

よろしいでしょうか？

【委員からの反対意見なし】

(内田委員長)

それでは、他に全体を通して、一章から四章でお気づきの点、ご意見がございましたら、出していただ

ければと思います。

とりわけ三章は第6回の委員会で議論がありましたので、それを踏まえて岡本さんたちが追加した部分もございます。特に p19 の諸室仕様はひとまず表形式で書いておきましたが、実際には設計者が決まってからも多様な意見を取り入れていけるような形式を想定しています。

(林(一)委員)

一つ構いませんか。p19 の規模について。

町民にこれを示す場合に、どれほどの規模になるか町民側も知りたいと思います。

それから、基本的な方針の中では図書館・美術館が主体になっていますが、それに郷土資料館とか色々な収蔵施設、専門分野の資料館、公文書館とかが加わって出来るとなると、かなり厳しいと思います。

前にも申し上げましたが、町内に残った色々な史料を、今後どういう形で整備し、保存・収蔵して、そして町民に示して活かすかも大事な課題です。

やはりこの郷土・地域に残る文化財も一つの宝です。なので、そういう物も展示して、「うちにはこういう史料が残ってるんだ」と自慢できるようにして、町内外から関心を持ってもらうことも、まちづくりの一つの課題だと思います。四万十町に行けばこういう施設が常設であるんだというのが柱の一つであり、町長の挨拶もそういったことを含んだように聞こえました。そういった面は、この計画だけでは我々もかなり理解しにくいです。内容が町民に発表された時に、どの程度、町民の心に伝わるか疑問を感じました。

その一点を、この計画書で説明していただきたいです。

(内田委員長)

ありがとうございます。

認識そのものは林さんと同じでこの委員会を進めてきました。そこは第一章にも記載しておりますし、元々のスタンス、私たちが何を大事に、何を核に、文化的施設を作るのかは文中に盛り込まれています。

それを具体的に数値化するかには、設計段階で確定します。これから設計業者が決まるわけですが、この計画書を隅から隅まで読んだ上で、業者は案を出す。そこでまずこちらが基本的な考え方をきちっと把握して決める必要があります。

さらに（設計業者が）決まってから、今言ったような「こんなものがうちにはある」「こんなところもある」という意見を上手く取り入れて最終的なものが出てくることのほうが大事であります。

むしろ最初に決めてしまうと、かえって私たちに足枷になることもあるのではないかという考えもあって、このようにしていただいたんだと、私なりに理解しています。

岡本さんに補足していただければ。

(ARG 岡本)

規模感で言いますと今まで正確な値がなかったんですが、役場で測量して、確定していただきました。

施設については p19 表の一番下で、延べ床面積が合計約 2,000 m²程度としています。ただし書き方は上手くしてあって、「約」にしてあります。最低限のスケールを決める必要があるということですね。

これからのやりくりの中で減らされると困るところは、明確に何 m²を確保するよと決めています。事務

室、会議室、作業室、荷捌き室といった、業務用途において削減されると困るものは、このくらいの広さは必要、という記載をしています。

お手洗いなんかも同じです。お手洗いもなんとなくこれくらいの数があればいいだろう、他の部分が必要だからここを削減しちゃえ、となりがちです。でもこれからの高齢者社会を考えると、お手洗いの個数はかなり必要になるでしょう。例えば窪川駅前のお手洗いは、駅前にしては明らかに足りないんですよ。だからそれを踏まえてこれだけの個数を具体的に示しているところもあります。

一方、林先生の視点で見た箇所だと、作業スペースが設計段階でこれから詰められるでしょう。配架エリア、収蔵庫等は全て設計で確定としております。

つまり、ここに実数を書き込まれているものを合算して 2,000 m²からマイナスして、残った数m²をどう利用するか、設計者の腕が問われます。

同時に美術館について、収蔵庫面積は目安として示します。ですがおそらくこれは設計者を選定する段階で、技量を見るのに充分だと思えますが、少なくとも現施設に足を運べば、表の上のm²をとりあえず確保すればいいわけではないということが分かるはずですよ。今はかなり無理して入れている状態です。ここに「歴史資料や文書資料の収蔵庫でもある」と記載されていますから、町としてはぜひこの町に直接足を運んで、しっかりと地域を見た上で提案していただきたい。

まさに林さんが言われた、どういう魅力を見せるかに関して、経験がそれぞれあると思われる設計者に、「こう見せるほうがより効果的だ」と提案していただきたいと考えてこのようにしました。

自治体によってはこの辺の数値をばっちり細かく決めてしまうことがあります。それだと設計者の創意工夫の余地が無くなってしまいます。建売住宅を建てる感じになってしまうと。そうしてしまうと、特にこれ、計画として確定してパブリックコメントもして、議会に示したりすると、あとから数字を変えにくくなるというのがあります。

今回はより良い施設の調達の知恵として、アバウトに書ける部分はアバウトに、絶対に譲れない部分は明確に数字を書いています。用途の配架・展示エリアには「最大 5 万点収蔵できる開架書架が欲しい」ということは書いていますし、座席もさすがに 100 席は、など。ソファもあれば丸椅子もある、様々なパターンがあろうと思います。とにかく 100 人が腰かけられる形にしてほしいといったところには町の拘りを示しています。

収蔵に関しては書庫の項で最大 2 万点としておりますので、合わせて、窪川の文化的施設では 7 万点の図書・新聞・雑誌の収蔵が図られる。ここまでは示しつつ、設計者に上手い使い方を提案していただくと考えております。

(林(一)委員)

ありがとうございました。

新しい、プロポーザル方式ですかね？ 馴染みのない方式なので理解しにくいですが、新しい方式で専門業者が、現状を十分把握されて設計すると、大体把握できました。

(酒井委員)

p4 の「上位関連計画との関連」がありますけど、これは上から順に重要なのか。

何が聞きたいのかというと、観光と教育と両方大事だということは常にここに入ってるんですけど、

なかなか同居しにくいものがあります。観光に特化すると町民のためのものにならないんじゃないかという見方をする方もいます。

この順番は教育に力を入れるか、観光に力を入れるか、順不同で出ただけなのかが気になりました。

それと私事ですが、先日東京に行ってきました。東京でコンビニに入るとスタッフがみんな外国人でした。私が思うに、四万十町は今、人口1万7千人を切って、今年は60人しか産まれてません。一方海外は77億人に行って、500億に近づいてる中で、外国人の方にも利用していただきたいなら、そういった旨があると、設計者も外国人が利用するんだと思われるかもしれないし。

町としては、図書館って何なのかなって。

観光に力を入れるのはいいけど、子どもたちに力を入れるのも有りだって思うし。これを解決するわけじゃなくて聞きたいと思って質問しました。

(内田委員長)

分かりました。ありがとうございます。

p4では、番号を振る必要がなければ、「●」で並べていいと思います。「どちらが」ではなく両方というぜいたくな基本計画ですよ。「あれかこれか」ではなく「あれもこれも」なんだと。それが町民にとって意味があると伝えるチャンスだと思います。

二点目は、外国籍の住人であり、ダイバーシティの行政の問題をどういうふうに入れるか。確かに論議が充分できてない部分ですが。だからといって排除するわけでもないし、基本的には誰でも歓迎する姿勢ではありますので、今回あえて加えなくても、そこに今の姿勢が貫かれるんじゃないかと。かえって入れるよりもいいかと思いますが。

もし工夫があれば、岡本さんとも相談して、また。

(ARG 岡本)

計画の順番は町の答えが必要です。先に言うと、総合振興計画が一番上にあることは間違いないです。

そのあとの酒井さんの指摘は重いですね。②と③の順番は、まちづくりとしては正しいんですよ。ただ、教育振興計画は総合振興計画の次に来てもいいくらいだよなっていうのは、言われてみて私もその通りだと思いましたが、どうでしょう？ 町としての順番があればお答え願いたい。

(事務局)

はい。確かに目から鱗の質問でございました。

教育振興基本計画は今年度に改訂したばかりです。最上位が四万十町総合振興計画なのは動かさないとありますが、その中で教育委員会が所管する教育振興基本計画を上位にやってもおかしくないのかな、と感じます。

単に控えめに、教育委員会部局として他の課を立てていたのかな、というところです。

(ARG 岡本)

これは本当に大事な論点です。

新しい文化的施設は、あらゆる課題を解決するための施設ではあります。ただ、第一義は何なのかと考

えた時には、「文化的施設」って言ってますからね。教育振興基本計画が2番目に来たほうが筋は通る。

私や行政の皆さんのように、これになんとか慣れた方では何とも思わなかった。ですけど、せっかくだからそうしたほうがいいんじゃないでしょうか。まちづくりも大事ですが、教育、今風の言い方だと人づくりが、四万十町の最も大事にすることだと。たかが並べ方かもしれませんが、大事なことだと思います。

(内田委員長)

では番号はそのままにして、④教育振興基本計画を②にして、他は③からくり下がっていくというところで行きましょう。

教育委員会、生涯学習課が所管で動いていただいていますし、当然、教育の計画が上位に来る流れで行きたいと思います。

他にはいかがでしょうか。

【委員からの意見上らず】

(内田委員長)

それでは、この基本計画を今日確定した最終版としてお認めいただき、頂いたご意見はこちらで引き取らせていただくこととなりますが、ご了承いただきたいです。

あと、今日お示しできればよかったんですが、「はじめに」に町長が書かれているので、「終わりに」の項に、この会の委員長をさせていただきましたので、私なりの思いの丈を400字くらい書かせていただくと思っているのですが。本当はお示ししてからがよかったんですが叶いませんでしたので。ご一任いただいてよろしいでしょうか？

【委員からの反対意見なし】

(内田委員長)

それでは7回に渡ってこの文化的施設基本計画について議論してきましたが、これにて一致・確定とさせていただきます。ありがとうございました。

では二つ目の協議に入ります。

委員会そのものは今日で終了ですが、今年度1月～3月の在り方についてご協議いただければと思います。もう少し気運を町民の中に盛り上げていかないとはいけませんし、より具体的にも、動き出すのであれば、研修や講演など、必要なものがあると思いますので、自由に意見を出していただきながらイメージできればいいと思います。

(ARG 岡本)

委員は年度いっぱい任期が続きます。委員会そのものの開催は本日をもって終了です。このあと、そう遠くない内に設計者選定のプロセスを開始します。設計者選定は今年度いっぱい終わります。最終選考会は公開で行われる予定ですので、皆様にも都合が合えば見に来ていただきたいです。

以上が一応大まかなスケジュールですが、その間、町民の皆さんと話し合ったり、町民にこういう流れをどう広めていったりするか、流れが止まってしまうのは大変惜しいことです。

ここは受託事業者として我々からの提案ですが、設計者選定の進捗がつつがなく行くようお手伝いするのと合わせて、図書館職員と町職員の皆さんの間で勉強会の機会を持つこと、そして町の皆さんとの間では対話の機会を持つことを、業務として請け負っています。ある程度は部分的にやってきましたが、全部が終わったわけではありません。

少なくとも我々は1月・2月・3月と毎月1回以上は必ず参ります。今までの流れを考えて、例えばこういうことをさせていただくのはどうかと提案します。役場とも協議はしていますが、基本的には委員の皆様にご諮って決められればと思っています。

具体的に言いますと、図書館職員の勉強会、公的な位置付けとしてはこの形を取るのが良いです。ただし、必ずしもそれを閉じた形にしなくてもいい。以前、鹿児島の下吹越館長にお越しいただいた際も、職員研修という形でしたけど参加できる方はするという形を取ったことがありました。

これから毎月同じ形で職員の勉強会を開く形にしつつ、来たい方は委員でも、声をかけていただいた方でも来られる勉強会の場を持つのが良いのではないかと。

勉強会の題材として最も良いのは、確定した基本計画書をみんなで読んでみることです。これなら委員の皆さんも「出来上がったから一緒に読んでみない？」という誘い方ができます。

もちろん計画はこれで確定してしまうので直すことはできませんが、来年度、設計計画なりサービス計画なり作っていくでしょうから、そこでの議論は決して無駄にはならず、次の計画書、バージョンアップした計画書作成に必ず役立ちます。かつ、この3か月、お休みにならず済みます。

もう一つ。これは刈谷さんや酒井さんに言われてずっと気にしてた点ですが、開催場所の工夫をしたいです。

私も窪川に来ている回数は相当ですが、十和や大正に行く回数は4~5回がいいところです。あと3か月あるので最低限3回(勉強会等)ができますので、例えば十和から始めて、大正→窪川(終了)みたいに、3地域を巡回するように機会を持てるといいと思っています。

酒井さんや刈谷さんはこの会場まで来るのに、往復時間を考えたら会議時間に匹敵するくらいかかっていて、それはフェアなことではないです。そしてお二人は熱意あっていらしていただけていますが、そこまでは熱意かけられないけど近所でやるんだったら顔出すよ、という方もいらっしゃると思います。

地域ごとによって土日と平日のどちらがいいのか、時間帯は夜か日中か、あろうかと思えます。3か月間そのような調整をしながら、「勉強会」だと堅苦しいので「語らいの会」とか車座集会の形か、皆さんの参加しやすい名前を付けて、計画について、みんなでワイワイやる話し合いの場が持てると思いいます。

できれば前回の米こめフェスタのように、共に育つ会という形で動きましたから、育つ会で後援するといえますか、開催共有する形で始めていけると、今までやってきた、皆さん取り組んできた有志の町民の参画を得ていこうという流れになるととてもプラスかなと。

そこが3か月上手く行きますと、4月には新しい施設を建てる設計者が決まりますので、その方々と町民の対話がとても大事になります。その時に最初から良い対話がどんどんできます。

まだぼんやりした素案で話してるんですが、役場サイドや私ども委託事業者サイドがいきなり確定案を出すよりは、粗い素案を話した上で皆さんのご希望を伺いたいです。以上です。

(内田委員長)

ありがとうございます。

いかがでしょう。今言ったような大まかなイメージはありますが、それも含めてまたご意見等出していただけると。

(酒井委員)

その時は設計者が決まっていますよね？

(内田委員長)

3月には決まっていますかね？ 開催日によりますが、プロポーザルの日はすでにお知らせしていますか？

(事務局)

まだお知らせしてないです。一応、3月末には決まります。中盤以降に。

(内田委員長)

でも、岡本さんがおっしゃったように、4月に入ってから（設計者が）決まっていますので、そこから話し合いができる町民の母体がしっかりしている、そこからスタートができる。そこは3月末を少しイメージできるんじゃないかなと。若い人にも参加してもらえそうな工夫もできるし。

公的な学習会の場を利用するということですが、それを開かれた場にする。もう少し行政側とも相談することもあるかもしれません。職員の研修の貴重な場にもしたいということもありますので、この委員会みたいになってはいけないわけで、きちっと学んでいただく機会ではあります。

(酒井委員)

以前の下吹越かおる館長の研修は、図書館に行ったり講義してもらったりと、私たちも参加・見学させていただきました。それでいくと、基本計画の読み込み方の勉強会に、いわゆるプロの方が来てする研修に、参加したい人が出るというイメージでいいんですか？

そうすると平日の昼間とか、職員さんたちの業務内容なわけですから、夜にするのは無理で、平日昼間前提でってなる？

(ARG 岡本)

外からどなたか招聘するのは考えてません。基本は私どもで良ければ、という感じです。

先生をお招きして何かではなく、なるべく町民目線で語らい、それに対して私どもが、これはこういうニュアンスでこういうつもりです、というふうに説明しながら進めるのが良いと思います。

次年度以降はまた講師をお招きしたり、あと、設計者の方にはどこかできちんと町民に「こういうことを考えて、こういう提案をしました」というお話と、設計者自身はどういう人間であるのかを、改めてお話いただく機会を作ったほうが良いとは思っています。

私どもも何かしら、次年度以降、施設が建つ前も建ってからも、色んな方がそこでお話ししていただける機会そのものは作りたいです。ただ本年度はもう外部からの招聘はここまでです。

(林(伸)委員)

プロポーザルに当たって設計者が決まるんでしょうけど、プロポーザルの要項、設計者に求めるものというのは、基本計画にあるものだけを設計者が見てやることになるんでしょうか？ それとももっと詳しい内容のものを付け足して出されるのかを聞きたいです。

例えば敷地が旧庁舎跡地と書かれてますが、周りの景観を見ると、お寺があって旅館があってとなかなか古めかしい感じです。せっかく「文化的」という部分もあるんで、そこを大事にして設計に当たるのか当たらないのか。

あんな場所にキラキラの金ぴかを建てられても困る気がするので、その辺の詳しい内容が精査されないと、とんでもないものが建ってしまったら、「せっかく委員会やってたのに何してたの？」なんて言われることになって面白くないです。

あと、あそこの導線です。特に入っていくに当たって、「町民に開かれた」と言う割には入りにくいです。そこも含めてどうするのかも僕らは気になります。

建物は大了ものでなくてもいいと僕は思うんですが、景観が良い場所であれば人が来てくれる気がするので、外の景色もちゃんと見える設計だと思いたいと思う所があります。

プロポーザルなのでそこで全て設計が決まるわけじゃないですが、最初に盛り込んでもらおうと選びやすいとも思って、そこはどんな感じなのかを聞いたかったんです。

(事務局)

まだ公表してないので詳しい内容はここでは言えませんが、基本的には、この基本計画の文脈を読んでいただいて、設計者の方に考えていただきます。

(内田委員長)

やはりこの計画書を読み込んでいただいて、場合によってはちゃんと（現地を）見ていただいとるか。

プロポーザルとは設計の中身ではなく人を選ぶんだという話が出ました。人といっても優しければいいとかそういうことではなく、岡本さんの言葉を借りればこの四万十町に骨を埋める覚悟のある人を選ぶということです。

林さんがおっしゃったことは盛り込まれていて当たり前だと、そういう理解でいいんじゃないかと思えます。

では、3月までの予定を岡本さんが今言ったようにしていきたいとのことですが、大筋はそれで進めてどうかと思いますが。

(ARG 岡本)

酒井さんの質問に答えきれなかったのですが、私どもなので、図書館職員さんの時間帯にも出る場合がございますが、時間は比較的フレキシブルに何とか致します。

地域のコミュニティによっては、例えば晩ご飯が終わったあとのほうがみんな集まるとかあると思います。そこは地域の実情に合わせて。大事なのは多くの方が集まることなので、上手く合わせたいです。

我々も委員会のある日の前後に町に来るという制約がありましたが、そこはある程度の自由を利かせることができます。私と有尾と、(ARG から) 2名くらいはそのスケジュールで地域の実情に合わせて伺いするのがよいかと。

どうしても必要であれば、一気にやり尽くすことはないとは思いますが、日中の会と夜半の会に分けるのも手ではあります。前半の時間は短くしておいて、日中 1 時間くらいやって。どうしても夜は出てこられない方もいらっしゃるでしょうし。

なるべく十和と大正でお話をする時間を持つのがとても大事だと思っています。

(内田委員長)

ありがとうございます。

なぜやるのか、その意味を大事にしていくと。

もちろん職員の方の研修の保証は、基本計画の中にもあります。今後もずっと、(施設を) 作る前、それから出来上がったあともしっかりと、専門性や力量の確保についての対応はやっていくんだと載っています。

今回はあくまで計画書を作り、これを元に 3 月まで語る場を用意していきます。

(酒井委員)

米こめの時に、出してもらった文書やプリントとかどこに回すのかとか、周知のための意思疎通が最初でできなかった分、バタバタした経緯があります。

より多くの人に来てもらいたいなら、渡辺梓さん講演会の時みたいに告知を、パフォーマンス的にもするとか。十和は 1 月でトップバッターなので急がないといけないんですけど、やるとしたらそこまで詰めてもらったほうが、育つ会の後援とか、一緒になって動く時にすごく動きやすいので、その辺を詰めていただきたいです。回覧とかそういうの。十和が 1 月なら日程まで決めてもらわないとすることができない。

(ARG 岡本)

年末年始で日がないこともありますが、役場がそこまで人的に対応できるかということ年末は議会もあり忙しいので。

年度内については、私はやや緩やかに進めるほうがいいと思います。皆さん、各地域での立場があるのも重々分かりますが、年度内に完璧を期そうとすると逆に進まなくなるので、第一ゴールを「止めないこと」にして、3 か月何も無くて「あれってどうなったんだっけ？」になるのを防ぐために「何かが動いてること」を第一目標にする。

「多くの人に参加する」は第三くらい。第一目標が「動いてる」、第二目標を「三つの地域で」、第三目標が「それぞれの地域で多くの方が」くらいにやる。三番目は難しいと思います。現実的に年末シーズンになると各地域忙しくて「今から言われてもな」となるでしょうが、そこで「止めない」ができれば「行

けなくて残念だったけど」に対して「4月以降もこういう場を持つんで、今回は無理でも次回は来てくださいね」というコミュニケーションのきっかけにするくらいで考えておくと、全体的に進めやすい。

確かに米こめフェスタの反省は私もありますが、その辺を踏まえながら新年度以降は「育つ会」とも合わせて体制作りをするための助走期間だと捉えてはいかがでしょうか。

(内田委員長)

ありがとうございました。二つ目の今日の議題はこれにて終了とします。

三つ目の議題は特に用意しておりませんが、皆さんからご発言ありますか？ 最後ですので、何か。

【委員からの意見なし】

(内田委員長)

それでは、7回に渡って、お忙しい中お集まりいただきまして、ご議論いただき、ようやくこの基本計画に至ることができました。

これをここで終わりにせず、この思いを実現する方向で、ご一緒にやっていきたいと思っております。

この四万十町の地域全体の10年後20年後、50年後を想定して、実りある豊かな地域になることを願っております。

ご尽力いただきまして、本当にありがとうございました。

これで委員会を終了したいと思います。

(事務局)

最後に、委員会の終わりに際して、熊谷教育次長からお礼を頂きたいと思えます。

(熊谷次長)

本来は教育長が参りましてご挨拶するのですが、どうしても外せない業務が入って出席できず、私から申し上げます。

皆さんにおかれましては、様々な立場で検討委員会委員になっていただき、これまで検討を進めて参りました。本当に長い年月を携わっていただきました。

個人的に思い出しますのは、私自身が後ろの席で子守りをしていたことです。教育次長が子守りをする会議が世の中にあるのか、と思ったことが思い出にあります。

皆さんには本当にお世話になりました。おかげで基本構想、基本計画が、順序を経て町の計画として出来上がります。色んな知恵やアイデアを出していただき、心より感謝を申し上げます。

今後は、整備後の管理・サービス計画も定めていかねばなりません。またこういう場があるかと思えますので、皆さんにはお力を貸していただきたいと思えます。

町民の声と思いが詰まった施設でなければならない。それを皆様は一番理解されているのではないのでしょうか。

大変名残惜しいですが、皆様のご健康とご多幸、ご活躍を祈念いたしまして、挨拶を終わります。

本当にありがとうございました。お疲れ様でした。

(事務局)

以上をもちまして検討委員会を終わります。ありがとうございました。